

福岡県立戸畑高校

組織的な生徒理解と指導

緊密な生徒情報の共有と探究学習を始めとする
活躍の場の充実により、生徒の潜在能力を引き出す



学校概要

- ◎設立 1936 (昭和11) 年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎2021年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、岡山大、広島大、九州工業大、九州大、熊本大、北九州市立大などに121人が合格。私立大は、青山学院大、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大、産業医科大などに延べ256人が合格。

変革の背景

生徒が社会課題に目を向け、
主体性を発揮するきっかけをつくる

「自主・調和」の校訓の下、「たくましく心豊かな創造者を育成する」を教育目標に掲げる福岡県立戸畑高校。盛んな部活動や、生徒主体で進められる戸高祭(文化祭)、体育祭などの学校行事が、地域から高く評価されてきた。そうした同校の生徒の、近年の変化について、3学年主任の久保紀美恵先生は次のように説明する。

「本校の生徒は真面目かつ素直で、潜在能力も高いと思います。ただ最近、進路選択に

おいてもっと大きな夢を描けばよいのにも思いうちもありません。高い目標を目指す力があるのに、『自宅から通える国公立大学に合格できれば十分です』といった言葉を生徒から聞くと、もったいないと思います」

進路指導課長の百瀬博先生は、大きな夢を描く力には、社会に対する視野の広がりに関係しているのではないかと指摘する。

「生徒は、スマートフォンで自分の関心のある情報だけを得て、保護者とテレビのニュースや新聞記事を見て話をする機会も減っているように思います。世の中で今、何が問題になっているのかが分からないため、『社会のこの問題の解決に貢献できるよう、この学問を学びたい。だから、この進路を目

指そう』といった大志を持ちにくく、安易に進路を選びがちなのかもしれません」

生徒の社会課題に対する視野を広げるため、久保先生は、生徒に関心を持ってほしいと思った出来事やキーワードを自身のコメントとともに紹介する(写真1)など、個々の教師が自分のことができることをしてきた。だが、ここ数年、進学校での指導経験がない教師や若手の教師の割合が高くなり、「学校全体として指導力を高めていく必要性が高まってきた」と、古屋敷悟校長は語る。

「生徒個々の実態を多角的に把握し、3年間を通して適切な時期に適切な指導をするこ

とで、生徒の主体性を育むことができます。これまで、教師一人ひとりの熱意と経験で

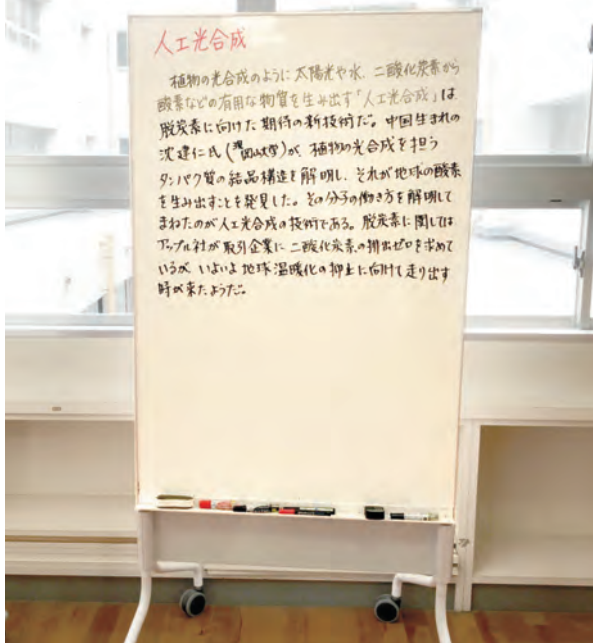


写真1 社会課題に対する生徒の視野を広げようと、3学年主任の久保先生は旬の話題に自身の解説を加えて生徒に紹介。ほかにも、社会課題に関する1分間スピーチをさせる教師や、新聞記事の要約と感想をClassiに投稿させる教師など、各教師が創意工夫してきた。

それを実現していましたが、組織として、教師同士が支え合いながら取り組んでいくことが今、求められているのだと認識しています」
加えて、進路部の園田祥穂先生は、生徒の課題について次のように語る。

「生徒は、文章を書く、発表をするといった表現力についても課題がありました。潜在能力はある生徒たちだとは思っていたので、アウトプットする機会を多くつくることで、表現力を高めようと考えました」

同校では、生徒を丁寧に見取るために教師間の情報共有を深め、「総合的な探究の時

間」で生徒の表現力や主体性の育成を図っている。また、それらの取り組みの結果、生徒は『さくら』を贈るプロジェクトにおいて、大きな変容を見せた。その軌跡を見ていく。

変革の一手

教師同士の対話を通じて、 組織的に指導力を高める

同校では週に1回、進路会議と3学年担任会議が開かれている。進路会議には、各学年主任、各学年の進路チーフ、進路部長が参加、3学年担任会議には、3学年の担任、3学年主任、進路部長が参加する。緊密な情報交換によって、学年やクラスを超えた指導の共通認識を持つことが目的の会議だ。

「いずれの会議でも、『この生徒にはこんな声かけが必要』などと、具体的な支援の方法を教師間で共有します。若手の担任が、『受け持つクラスに、建築学科を志望している生徒がいる』と話すと、ベテランの担任が、『建築学を広い視点で捉えられるように、建築学に関係する社会課題についても投げかけてみてはどうか』とアドバイスするなど、ベテランから若手への指導の伝承の場にもなっています」(百瀬先生)

同様に、11月と1月に行われる3学年進路検討会も、以前は生徒の志望を確認することを目的とした場にとどまっていたが、近年はベテラン教師が若手教師に指導の知見を共有する場へと変化した。

また、1・2学年では各学期に1回、進路部による進路説明会を実施し、クラス間で指導に温度差が生じないように配慮している。さらに、同校での赴任歴が長い教師を中心に、面談での声かけを学び合う自主的な研修会を継続的に実施しており、「個」ではなく、「教師集団」としてのスキルアップにつながる取り組みを重ねている。

生徒の様子を丁寧に見取り、適切な支援を行いながら、生徒が主体的に活動する場の充実も図っている。その1つが、1・2年次の「総合的な探究の時間」で行っている「Ace Program」(P.36写真2)だ。生徒は自分の興味・関心のあるテーマの課題研究にグループで取り組むが、1・2学年団の教師全員がグループを受け持ち、生徒たちの探究に伴走する。園田先生は、「Ace Program」は教科の授業だけでは見ることのできない生徒の一面を理解する機会だと考える。

「19年度の『Ace Program』では、70のグループのうち、優秀な成果を収めた2つのグループがステージ発表に臨みました。その様子を

見て、何人もの生徒が、『発表できていいな』『やってみたかったな』といった言葉を口にしていました。生徒たちは、私が思っている以上にチャレンジしてみたいという気持ちを持っていくことに気づきました」

「[Ace Program]での生徒とのかかわりの中で、『生徒は積極性に乏しいのではなく、積極性を発揮する場が不足していたのだと多くの教師が気づいた』と、久保先生は語る。

「学校外で実施されるワークショップなどへの参加も、学年集会などで呼びかけても手を挙げる生徒は少ないのですが、生徒に個別に声をかけると、『実は興味を持っていました』と前向きに反応します。積極性を発揮する場を具体的に提示し、『やってみたら？』と背中を押すことで、生徒のその後の行動は大きく変化するのだと気づきました」

生徒の潜在能力を知ることが 授業改善の原動力になる

2020年度末、同校の教師が生徒の秘めた力の大きさを実感する出来事があった。大塚製薬株式会社「カロリイメイト」が展開する『さくら』を贈るプロジェクト（写真3）で、同校の有志生徒が協働することになったのだ。同プロジェクトは、コロナ禍のため卒業式で歌が歌えない学校が多い状況を受



写真2 「総合的な探究の時間」で行っている「Ace Program」の2年生のポスターセッション。先輩の発表を見る1年生に、「内容」「伝え方」「自分がやってみたい工夫」などの観点を提示することで、自身が探究活動に取り組む際のイメージを深めさせた。

けて、歌手の森山直太郎氏が同氏の曲「さくら」を歌う中で、友人や恩師との思い出の映像などとともに感謝の気持ちを伝える動画を制作する取り組みだ。大塚製薬を始めとする東京の制作チームと戸畑高校の有志生徒、そして森山氏がオンライン会議ツールを活用してミーティングを重ねた結果、コロナ禍の1年間、様々な面で我慢を求められた3年生に向けて、在校生が「さくら」を合唱する動画を作成し、3月の予餞会（在校生が卒業生を送る会）で披露するという企画になった。在校生や教師が「さくら」を歌う動画の撮影・編集はすべてプロのスタッフが事前に行い、

予餞会当日に東京のスタジオから森山氏が生中継でサプライズ出演した模様は、動画投稿サイトで公開され、大きな反響を呼んだ。教務部長の大村高敏先生は、『さくら』を贈るプロジェクト」は生徒の課題解決力を育



園田祥穂 そのだ・さちほ
進路部
教職歴8年。同校に赴任して3年目。理科。



百瀬博 ももせ・ひろし
進路指導課長
教職歴18年。同校に赴任して3年目。数学科。



加藤敦子 かとう・あつこ
広報課長
教職歴23年。同校に赴任して4年目。家庭科・情報科。



久保紀美恵 くぼ・きみえ
3学年主任
教職歴33年。同校に赴任して9年目。英語科。



大村高敏 おおむら・たかとし
教務部長
教職歴21年。同校に赴任して4年目。英語科。



古屋敷悟 こやしき・さとる
校長
教職歴36年。同校に赴任して2年目。



写真3 公開中の「森山直太郎×カロリーメイト『さくら』を贈るプロジェクト」卒業ドキュメンタリー。生徒が歌う「さくら」、予餞会の様子、そして森山氏と予餞会を企画・運営する生徒とのミーティングの様子なども紹介されている。
<https://youtu.be/n0sH9F5AIHU>

成するよい機会だったと振り返る。

「先輩のために何かできることがあるはずだと考え、外部の大人たちと対話し、コロナ禍の中でもよりよい予餞会を目指して模索する様子は、Project Based Learning そのものでした。生徒たちが発揮した力は、まさに『Ace Program』で育成を目指した力であり、私たち教師は、『やはり、本校の生徒はこれだけの力を持っていたんだ』『生徒が活躍する場をもっとつくりたい』と改めて思いました」

「Ace Program」や「さくら」を贈るプロジェクト

クト」での生徒の活躍は、「私たち教師にとっ
て授業改善を後押しする力となっている」と、
広報課長の加藤敦子先生は話す。

「自分で考え、決めた学びや取り組みの中
でこそ、人は大きく成長するということを、
生徒は教えてくれました。だから私も、生徒
が自分で考え、他者のために行動できるよう
なグループ活動を、授業の中にもっと取り入
れていこうと思うようになりました。『さく
ら』を贈るプロジェクト』は生徒の真の力を
知る場になりましたが、これからは、日々の
授業の中でもっと生徒が力を発揮できる機
会をつくってまいります」

変革の成果・展望

どうすればできるかを考え、
新しいものを創り出す力を獲得

「Ace Program」で社会を知る経験を積ん
だことによって、社会課題に対して自分が成
し遂げたいことを表明し、そのためにはどん
な学問を学び、どの大学に進むべきかを考え
る生徒が増えてきた。また、「Ace Program」
で発表経験を積み重ねたことにより、表現力
が向上し、発表することに対して意欲的な姿
勢を見せるようになった。


そして、『さくら』を贈るプロジェクトは、
生徒たちの中に鮮烈な成功体験として息づい
ている。

「やるかやらないかで悩むのではなく、や
ると決めてしまつて、どうすればできるかを
考えよう』『このチャンスを生かして、自分
しかできない経験をしてみよう』といった教
師の言葉を、生徒がしっかりと受け止めてく
れるようになりました」（百瀬先生）


「生徒たちは、コロナ禍においても、学校
生活に主体的に参画しています。自分にはで
きないと諦めるのではなく、現状から、新し
い何かを探し、創り出す力を身につけたので
す」（大村先生）

今後は、「Ace Program」において、より体
系的に指導ができるよう、構成のブラッシュ
アップを検討する予定です。

VIEWn-expressでは、
福岡県立戸畑高校の
「『さくら』を贈るプロジェクト」
における生徒の学びや
気づきについて
詳しく紹介！
ぜひご覧ください



坪井美樹さん
(3年生)



山田慎之助さん
(3年生)

VIEW n-express